

kumo+の初活動となる今回の議論は、八東研博士課程の金子祐介氏を迎えて議論を行いました。東京を拠点に活動している我々にとって、「地方」を考えるきっかけはあまりにも少なすぎます。東京を考えることは地方を考えることの裏返し？いやいや、もっと真面目に地方について考えましょうよ。それでは、第一回目の議論、スタートです。  
第一回/有楽町にある居酒屋「まんぶく食堂」にて収録。  
topic1. 東京の真ん中で地方を語ろう。2009.04.28  
<http://studiokumo.web.fc2.com/>



「自分の建築を愛してくれるただ一人の人間のために。」丸山洋志

OH05M

そこが東京とは違うんじゃないかと。金子「うーん、確かにそれはそう。地方は東国原氏が宮崎で行なったような「地方名産品」をつくっていかないとダメだよ。だから地方に特化した建築もあるいは重要かもしれない。でも、地方が東京にとってかわるなんてことはおそろくないだろうから、地方の目指すべきところは東京ではないはず。地方はこれから東国原氏がやったような政治としての建築を目指すべきじゃないかな。」

地方建築家とは何か。「空気」から建築をつくる。 —

OH09M

上野「何か今急に地方建築家イコール長谷川逸子だなんて思った。大倉「え！？まあ確かにそうだとはいえ。あの人はワークショップなんかで地域住民と密着しながら建築をつくっているし。金子「あの人は焼津（静岡県）の出身か。大倉「そうですね。金子「彼女なんかの時代は、地方から出てきて東京で一花さかせてやるうってというのが重要だったのかも知れないよね。だけど、これだけ地方が疲弊してしまっただけに本当にそれが重要なことなんだろう。東京で学んだことを地方で生かすってのがこれからの時代じゃないの？」

大倉「確かに近年の卒制（卒業制作）なんかを見ててもそういう傾向がありますよね。地方を敷地に選んで、地方のコンテクストから建築の在り方をさぐっていくような。金子「でも八束研じゃそれはできないでしょ（笑）上野「うーん、でもその傾向はあるね。大倉「しかもそれが結構上位に残ってたりする。上野「僕は地方で生まれ育ったんで、地方をどうにかしなきゃいけない。みたいな。そういう傾向は確かにある。金子「でも、それは地元愛じゃないでしょ。って僕は最近そう思い始めてるんですよ。所詮は東京で勉強しちやっただけだから、建築家にな

るといつても政治的であるべきだというのが僕の意見。いくらアイロニカルなことをやって地方を盛り上げようとしても、おそろくもう無理でしょ。お前さんたちの親が政治家なら話は別だけどね。そうじゃないなら「地方を！」って頑張っても建築家がワーワー叫んでるだけになる。「地方に根付く」なんて今までもやってきた建築家はいたけれど、状況は結構ひどい。確かに頑張っている建築家はいるけど、長谷川さん以外に誰が思いつくだろう。山道「うーん……」

金子「例えば僕らの時代には若手で有馬裕之さんっていう建築家がいっぱい。有馬さんは主に九州で活躍してた。山道「あと、葉祥栄さんとかは？金子「いや、葉さんはもともと古い。なんかそれ、俺の年をバカにしてない？（笑）山道「違いますよ、そういうわけじゃなくて（笑）地方で頑張っている建築家として。あと、三分一博志さんとか。あの人は主に広島で活躍してる。金子「まあたしかに三分一さんは良く知ってる。でも重要なのは、彼らのやっていることって本当に地方か？ってことなんだよね。山道「うーん、確かに。金子「有馬さんにしても、三分一さんにしても、五十嵐淳にしても、共通しているのは彼らがつくっているものが本当に地方なのか？ってことを言いたい。結局彼らは東京にいても同じものをつくっているんじゃないのか？原広司さんだって新潟に根付こうとして建築をつくっていた時代があった。彼の地元は新潟だからね。」

実はそこで出てきたのが有孔体理論なんです。有孔体理論「なんて難しく言っているけど、結局あれは雪国に適した建築の在り方を示したものだ」と僕は考えている。なのに彼はそれを論として提出した。本来は場に合った、風土に合った建築をつくんないけなく、彼はそれを一般化した。

大倉「なるほど。僕の中ではGAに載っているような建築で、アメリカの大草原に建ってます！みたいなものが地方に建つべき建築なんだろうなっていうのが漠然としてあるんです。というよりそういう建築にここが来ていて、風土にあった建築っていうのが自分の中ではそういうイメージでしかない。アメリカの大草原なら「確かに風土にあっているね」って納得できるけど、地方「小都市のような場所ではそんな会話は多分通用しない。今の話を聞くと風土だけでは「地方建築」はつくれないって気がしてくる。金子「確かに、風土だけだと物足りない。その土地の空気とか、政治の質をもっと見ながら今の時代に何が必要かなっていうのを考えていくことも重要。今の建築家にはそういう「時代を読めない」建築家もいっぱいいる。その点では意外とゲリーが一番時代と風土を読めた建築をつくっているんだと思う。スペインのビルバオが建った時代なんかは、ちょうどビルバオが疲弊してた時代だった。そういう時にゲリーはそこに何が必要なのかって事をちゃんとわかってる。アイコンとしての建築がここになきゃいけないって。つまりそれが「風土」を読むってことなんじゃないかっていう風に僕は思う。単に伝統なんじゃなくて、全体の「空気」を読むことが実はものすごく重要。 —（次ページへ）





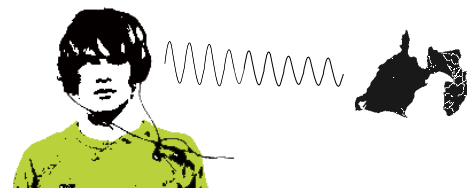
今回の参加者

- 上野翔 (kumo) 一八東研究室学部4年
- 大倉健 (kumo) 一八東研究室学部4年
- 山道雄太 (kumo) 一八東研究室学部4年
- +金子祐介 一八東研究室博士3年

Document vol.1「東京から地方を語る」/まんぶく食堂/2009.04.28

金子「逆に聞きたいんだけど、じゃあ静岡の風土って何？大倉「うーん・・・。何かって言われても特にないですかね。静岡っていうか、それは田舎の風土って感じですよ。「静岡」としては多分括れないんじゃないかなって思うんです。「東京以外の田舎」として括るしかない。」

金子「ホントに！？僕は東国原氏が目指す地方ってのは他とは全然違うんじゃないかって思ってるよ。あそこまで出来れば勝ちだよ。だけど建築家であそこまで出来るのって言うところちょっと疑問。でも実は鎌倉にすごい建築家がいるの知ってる？武基雄って人なんだけど、その人が鎌倉建築クラブってのをつくって鎌倉の建築を変えていこうとするわけ。五十嵐太郎さんも同じようなことをやってるけど、彼らはそういう点ですごい。」



「建築物」では何も変えられない現状から、建築「クラブ」をつくることに尽力する。建築クラブから建築家たちにメッセージを発しているんだよね。大倉「あー・・・なるほど。共同体をつくってその中で八東先生の「東京計画」のような事ややっていく。金子「そうそう。宮本佳明さんだって共同体をつくって「大阪湾計画」みたいなことを計画してる。それで学生たちを盛り上げたりしてるよね。だから静岡もそういう風に作れるはず。大倉「それは「空想」を読んでってことですよ。金子「そう。そういうのをこれからやってください。上野「それが大倉だったりしちゃうかも（笑）」

金子「長谷川さんを持ち上げたいって共同体をつくってみたい。必ずしも目に見えてるものだけが建築だってことじゃないからね。音声だって蓄積すれば建築になりえる。大倉「確かに単なる「建築物」での建築は「地方建築」とは言えない気がしてきた。金子「そういうのやってみれば？卒制でさ。大倉「え！？」

金子「これからは地方の時代だって感じて。ただ東京は残さなきゃいけないから一極集中はやらせとこうみたいな。でもそういうことをやった人がすでにいて、実はそれが磯村英一っていう人。この人は「エキユメノポリス」という理論を磯崎の「メガロポリス」に対抗させてやってきた。だから大倉も八東先生に対抗して「ポスト磯村」という立場をとって見たら？大倉「確かに今は東京計画を批判的な目で眺めている点はあるんですけど。」

金子「だったらそれやりなよ（笑）。八東先生もそれは分かっていることだと思うよ。だからこそ研究テーマとして磯村氏を学生に研究させている。自分ひとりだと対立軸が見えてこないから、自分の研究を批判的に見るのができない。山道「ちよっと面白そうかも。金子「でも八東研だからやっぱり都市計画的に見た上でどうかってのを踏まえなきゃダメだろうね。だから太田くん（博士三年）みたいな人口を計算したりっていう作業がまずは必要でしょ。大倉「えー・・・。金子「で、その結果やっぱり地方だよ！っていうのを言い切ってみせる。磯崎さんの九州オリエンティック案にはそういうイメージがちよっとあって、あれはアジア共同体として東京都は違った共同体をつくるのが目的として一つあったわけ。ソウルと上海と博多をつないで「博多湾計画」を進めたようにね。静岡にだって今度空港が出来るわけでしょ？だったら何かと共同体を組むってことがかなり重要になってくるでしょ。大倉「なるほど、これからは共同体から地方建築を発信することが重要だ、と。」

Review—2009.04.28

それぞれがそれぞれの思う地方について語っている。その微妙なずれ自体おもしろそう。そのあたりを今度しっかり話してみたい。そうだった地方同士の僅かなずれの振り幅の拡大が、その延長に今回テーマになった「東京」と「地方」を区別する差異となっているのか。それとも、そこには全く別の意味での差異が存在するのだろうか。そういったプロセスを丁寧に追っていくことで、地方と東京というパースペクティブがもっと明解になっていくような気がする。—上野（2009.05.03）



有馬裕之（ありま ひろゆき）  
1956年 鹿児島県生まれ。京都工芸繊維大学卒業後、1990年 有馬裕之+Urban Fourthを設立。  
三分一博志（さんぶいち ひろし）  
1968年 広島生まれ。東京理科大学理工学部建築学科卒業。小川晋一アトリエを経て、三分一博志建築設計事務所設立。  
葉 祥栄（よう しょうえい）  
1940年 熊本市生まれ。慶応義塾大学経済学部卒業後、アメリカウィテンバーグ大学ファイナ・アブライドアーツ奨学生  
1970年 葉デザイン事務所設立。  
武 基雄（たけ もとお）  
1910年 長崎市生まれ。1937年 早稲田大学建築学科卒業。石本建築事務所を経て、武建築設計研究所主宰。